



クリティカル・リアリズムの方法と家政教育の新たな展開

家政教育部会部会長 正保 正恵

1. はじめに

家政教育部会の発足は、今年70周年を迎える家政学会の部会の中では極めて遅く、1996年に発足時の委員長であった藤枝恵子が大きくかかわって家政教育研究会が発足し、2003年に部会へと発展した。この間、22年の歴史の中で、一貫して家政学の社会貢献を考えてきた。そしてその中でも、長年取り組んできた「家庭生活アドバイザー」の資格化が本体の(一社)日本家政学会によって実現することとなった。2017年度にパイロット講座が開かれ、2018年度(今年度)からは、正式な資格化が進められることとなっている。さらに、(一社)日本家政学会の今年の70周大会のメインテーマは、「今こそ、社会貢献を考える」で、日本の家政学発祥の地日本女子大で行われる。家政教育学会の長年考え続けてきたことを(一社)日本家政学会が形として表現していただいた元年と考え、心から歓迎している。

そのような中で、家政教育部会としては、「家政学の社会貢献」を真正面からとらえ、しっかりした理論化と実践との往還に資する研究を志したいと考えている。そもそも、家政学は総合科学であり、総合化(学際化)と細分化の往還を繰り返すなかで個人・家族・コミュニティのWell-beingをめざす学の体系であるが、我々はその具体的な方法をシェアできていただろうか。

そこで、今回は英国よりDr. Leigh Price(以下、リー先生)をお迎えして、家政教育の学際的な科学としての理論化と実践家としての構えを試行的に展開してみたい。クリティカル・リアリズムという理論は、わたしたちがめざすところの研究と実践をどうつなぎながら活動するか、という点に大きな示唆を与えてくれる。難解な部分もあるが、リー先生はそれを初心者にもわかるように説明してくださっている。以下に、リー先生の原稿を当日

の通訳であった上野正恵さんが訳した日本語原稿を当日配布した「要旨集」¹⁾から引用しながら要約する形で示していきたい。その際、リー先生が引用されている文献については、脚注の形で示していくこととする。この「要旨集」に示した全容は、いずれ皆様にお示しできるようにしていく予定である。また、本文中の太字は、正保によるものである。

今回のセミナーにおいて、前半ではリー先生よりこの講演を伺い、後半ではその講演の一部分ではあるが最も重要なポイントであるレトロダクションを主に用いてワークショップを行っている。レトロダクションを具体的にを行うときに使う「バックキャスト」も重要なタームである。

2. クリティカル・リアリズムとは

今回のセミナーで示された内容は、ロイ・バスカー(Roy Bhaskar)・バース・ダナーマーク(Berth Danermark)・リー・プライス(Leigh Price) *Interdisciplinarity and Wellbeing* (『仮学際性とウェルビーイング』)²⁾に依拠している。講演タイトルは“Critical realism as an approach to home economics education: encouraging interdisciplinarity”(『家政教育へのアプローチとしてのクリティカル・リアリズム:学際性のすすめ』)であった。

「私(筆者注:リー先生)がそれほど威圧的ではないと考えるクリティカル・リアリズムの一面は、それが単純な目的をもっているということです。クリティカル・リアリズムは、「私たちの言うこと」が「私たちの行うこと」と矛盾しないように役立とうとしているにすぎません。したがって、クリティカル・リアリズムは、概して、ものごとを行う新しい方法や新しい知識を示唆するものではありません。むしろ、私たちの言葉を私たちの行動に添わせるだけなのです。つまり、ある行為が特定の目的を達成していると言うならば、その行為が実際にそれらの目的を達成しているかどうかを確認する必要があります。このことは私たちに活力を与えてくれるものです。というのも、私たちにとってすでにうまく機能している

Masae SHOUHO

福山市立大学

著者紹介(略歴)1983年奈良女子大学卒業、2008年神戸大学大学院自然科学研究科博士課程修了

〔専門分野〕家族生活教育、家政学原論

行為をもっとよく理解するならば、その行為を続け、うまく機能しない行為は避けることができます。言い換えれば、エウダイモニア（皆が花開く社会）はまったく新しいものではない。むしろ、エウダイモニアの種は私たちの今の社会にすでに存在しているのです。つまり、エウダイモニアは今の社会にすでに「内在的」であると言うことができるのです。私たちの目標は、ウェルビーイングの実践者として、私たちや私たちの社会の繁栄を妨げる不足や欠点（不在）をただ取り除くことなのです。バスカー先生の言葉です*1。

「各成員の自由な開花が全成員の自由な開花の条件となるこの社会は、決して事後編集（post-ed）として存在するのではなく、内在的で傾向的な可能性として存在している。」

この「ポスト・エド」という言葉は一般的な言い方ではありません。バスカーは動詞として「ポスト（post）」を使っていますが、ここでの「ポスト」は「ポスト構造主義」や「ポストモダニズム」で用いられるように、「～を超えて（beyond）」や「～の後に（after）」と関係があります。つまり、ここで彼は、エウダイモニアはこの世界を超えたところに在るようなものではなく、むしろすでにこの世界に存在しているものの、閉塞された形で存在しているものであることを意味しているのです。したがって、どんぐりがよく育ち最終的に樫の木へと成長するために必要な唯一の行為が、樫の木になるというどんぐりに既存の傾向を止めるものが何もないことを確認するだけであるのと同じように、ウェルビーイングの実践者としての私たちの仕事は、エウダイモニア、誰もが開花するエウダイモニアに向かって成長するために、すでに社会のなかに存在している傾向を止めるものが何もないということを確認すればよいのです。

時に、私たちは、厳密には真実ではない私たちの行いについての「物語」を語ることがあります。時に、厳密には真実ではない「物語」が私たちに語られることもあります。したがって、クリティカル・リアリズムは、信念についての真実を確認するために、私たちに自己再帰的であることも求めます。ゆえに、個人として、また地域社会として、私たちの個人的、文化的、そして社会的信念の真実性を再帰的に検討する必要があります。この真実の再帰性という目的が、事実上、私たちがすべての人の幸福と繁栄を達成するということになるのです。」（要旨集 pp. 25-26）

ここで確認しておきたいことは、家政学の社会貢献を考える家政教育部会がめざすスタイルとは、個人・家族・コミュニティのウェルビーイングであり、それは上記に出てくるエウダイモニアという状態とほぼ近いものと思われる。そのための方法は、「予防」「教育」「協働」

である。つまり、ウェルビーイングという目的を共有しながら、衣・食・住・家庭生活・環境などの家政学としては細分化してきたそれぞれの分野がコラボレーション（協働）して未来の市民を教育していく、という行いの具体的な方法を示していこうとするものがクリティカル・リアリズムであると認識している。

3. クリティカル・リアリストの重要概念

クリティカル・リアリズムをより深く理解していくために、以下の概念は必須で押さえておく必要がある。今回は、虐待を例にして概念をわかりやすく説明されている。

(1) 層の実在（Layered reality）

「経験的リアリズムは、私たちが経験できるものだけが実在すると仮定します。しかし、クリティカル・リアリズムは、現実には経験的なものよりもっと多くのものがあるのだと考えます。現実には、アクチュアルなできごとや、実在の構造やメカニズムもあるのです*2。

- ・虐待行為への実在的（Real）な傾向－虐待傾向にあるかもしれませんが、この傾向を表現してはいません。
- ・アクチュアル（Actual）な虐待行為－人は虐待を受けていますが、巧みな心理的虐待のように、測定できない方法で虐待を受けています。もしくは、過去に虐待を受けていました。
- ・経験的（Empirical）な虐待行為－虐待の確実な証拠がある、もしくはカウンセラーが傷など顕著な痕跡を残す虐待を確認するなど、人が測定可能な方法で虐待を受けています。

経験的リアリストにとっては、虐待が経験的であるときしか、虐待についてほんとうに知ることはできません。しかし、クリティカル・リアリストは、レトロダクションの論理を用いれば、アクチュアルな虐待と実在の虐待についても、誤りを免れないにもかかわらず、知ることができるのです。」（要旨集 p. 27）

この後に出てくるレトロダクションという概念（方法）がクリティカル・リアリズムの方法においては、特別な意味を持つものであることが分かる。

(2) レトロダクション

「レトロダクションは、帰納法や演繹法のような論理的推論方法の一種です。

- ・帰納法（Induction）－規則性を観察することによって得られた一般的な法則を与えます。例えば、私たちは毎日太陽が昇るという経験をするため、太陽は毎日昇るであろうことを帰納します。
- ・演繹法（Deduction）－帰納法則によって導かれた一般

法則をもとに予測を行います。例えば、もし x (太陽が毎日昇る) ならば y (太陽は明日も昇るであろう)。
・レトロダクション (Retroduction) – ものごとがなぜそのようであるかについての理論を提供します。例えば、地球が24時間に一度地軸を中心に回転するため、太陽は毎朝昇ります。

学校や大学で教えられているような主流の科学理論では、通常は帰納法と演繹法についてのみ触れますが、クリティカル・リアリズムはレトロダクションを含みます。これは、主流の科学がレトロダクションを使わないと言っているわけではありませんし、実際使っているのですが、科学的方法論においてレトロダクションは言及されていないのです。クリティカル・リアリズムが行為を理論に沿わせようとしていることを思い出してください。クリティカル・リアリストは科学者が科学理論においてレトロダクションに言及することを望んでいます。なぜなら、レトロダクションは、彼らがすでに行っていることに関するより完全な記述であるためです。」(要旨集 pp. 27-18)

このレトロダクションこそ、後半のワークショップで家政学・家庭科教育の強みを生かすための道具として「使える」方法である。一般的に使っていながら、この度可視化されたものと考えることができる。

「レトロダクションはつねに、あらゆる証拠もしくは状況の特徴を最もよく説明する理論が選ばれる「判断論的合理性」(judgemental rationality) と併せて用いられなければなりません。さらに、レトロダクションは帰納法や演繹法とは異なり、誤りを免れません。おそらくこのために、科学者はレトロダクションを科学的方法に含むことを望まないでしょう。というのも、ものごとを知るための効果的な手段としてレトロダクションを受け入れることは不確実性を抱え込むことでもあり、また、私たちの知識に関して、絶対主義者になるのではなく、謙虚になることだからです。「誤りを免れない」とは、新しい情報に照らして私たちは考えを変える必要がありうることをレトロダクションは認める、ということをお私意味しているだけなのです。

レトロダクションによって私たちが知ることができる実在の一部を、バスカーは**超事実的なもの (transfactuals)** と呼びました。超事実的なものは、何が起こる「であろうか」(‘would’) についてではなく、何が起こって「いるのか」(‘is’) について、おそらくははっきりしない方法で示します。私たちは、例えば、虐待的傾向は相応な状況(貧困、ストレス、飲酒のような)において虐待となって生じるのだとよく言います。それとは反対に、クリティカル・リアリストは超事実的なものについて、虐待的傾向は、その実際のあるいは認識可能な影響が例

えば貧困のようなストレスの不在によって相殺されているかどうかにかかわらず、現に常に存在していて作用しているのだと述べます。このように、超事実的なものは、実際の成り行きに関わらず、事態が現に進行しているレベルへと私たちを連れて行くのです*3。」(要旨集 pp. 28-29)

慣れていない術語が続き、難解に思われるかもしれないが、具体的なワークショップを行うことで、参加された皆さんはとて納得されておられたことを書き添え、続けてリー先生の提示されたキーワードの説明を続けたい。

(3) 実在の意存的 (transitive)、自存的 (intransitive) 次元

「バスカーは意存的領域と自存的領域を区別します。自存的な対象は、それを目にする人間が存在するかどうかにかかわらず存在します*4。意存的な対象は、「その時代の科学的営為を通じて新しい知識として作り直されるはずのもの」*5 です。実在の意存的かつ自存的な次元をひきうけることで、クリティカル・リアリズムは、ポストモダン／解釈的方法論のとり存在論の否定を全体として回避します。また、知の生産における人間や社会の役割を本質的に取り除くことによって、その認識論の「対応理論」が概念上実在する絶対的な対象物へと帰着してしまうナイーブな実証主義的実在論を回避するのです。」(要旨集 p. 29)

この文章だけですべての読み手には届かないかもしれないと思われる。宇宙が137億年プラスマイナス2億年前に誕生し、12の偶然が重なったところで人類が誕生した、という事実から、たとえば人類がすべて消えてなくなったとしても人類以外の生物や無生物は厳然と存在する、ということは想像に難くない。それらを「自存的」と表し、かたや、意存的とは、時代・地域・そこに生きる個人などが関わって形成されるものである。家政学は、その二つを切り分けることで、新しい地平が見えてくるのではないかとさえ考えている。

(4) DREI (C)

「バスカーは実在研究と応用研究の両方について指針を与えています。彼の指針は、自然科学および社会科学の文脈に等しく適用することができます。それは、自然科学および社会科学のさまざまな主題はかなり異なる方法でアプローチされなければならないことを認めるにもかかわらず、社会科学／自然科学の方法論的分断を取り除くというものです。これは学際性を達成するための非常に重要な概念です。応用科学というよりは純粋科学としてのバスカー版の科学は、DREI (C) アプローチ*6 とし

て知られています。それは以下のように説明することができます：

- ・ **記述 (Description)** – それを記述するには、おそらく最初の文献レビューを通してその問題に関してこれまでに知られているあらゆるものを見つけようとしてみます。あわせて、調査対象そのものについても一次データの収集に時間を費やす必要があるかもしれません—この時点では、現在の知識における矛盾やその他の不在を認識するようになるでしょう。
- ・ **レトロダクション (Retroduction)** – これは創造的な「なるほど！」という解釈的瞬間で、研究されているものや状況が「そのようなものとして」あるためには「どのようなものであなければならなかったか」について推察します—このように、それについての知識の不在の不在化、および／もしくは、現在の理解における矛盾を不在化するのです。
- ・ **除外 (Elimination)** – 競合理論を比較して除外するために「判断論的合理性」を用います—おそらく文献レビューをさらに行う必要が生じるでしょう。また、研究文書ではディスカッション部分に記されるのが最もふさわしいでしょう。
- ・ **同定 (Identification)** – それが発明であればそれを作り、それが理論であればそれを他の文脈に適用します。すなわち、それを使用し、あるいはそれを試してみても適切であればここでは演繹的な実験的試験を含みます—その知が世界の実在の一部を特定したと想定します。
- ・ **修正 (Correction)** – 超事実的理論を使っている証拠に基づいてその理論を修正します—すなわち、実践です。しかしながら、何が起きているのかについての理論がすでに存在する場合、つまり、関連する超事実的メカニズムについての理論をすでにもっている場合、さらにその理論を他の状況を説明するために適用する場合にはレトロダクション（レトロダクションではなく）の論理を使っているのだ、とバスターは説明します。したがって、レトロダクションは応用科学研究の論理になります。時間が限られていますので、応用研究モデルの全容の説明は控えますが、それについては、『弁証法—自由の脈動』(Dialectic: The Pulse of Freedom) ほかを参考になさってください*7。』(要旨集 pp. 29-31)

以上の中では、「不在の不在化」というタームが分かりにくいだろうか。「不在の不在化」とは、本来あったはずのものが無い、ということの発見である。無いことがあるのを見つけることはとても難しいことのように思われるが、おそらく多くの科学は比較したり実験したりしながら、無意識のうちにレトロダクション（応用科学の場合レトロダクション）を行っているのである、ともい

える。

(5) 創発 (Emergence)

「バスターによって強調された最も重要な概念の一つが創発の概念です。心が体から発生してくるあり方、あるいは社会が人間から出現してくるあり方を考えてみてください。社会が人間から出現してくる場合を考えると、最初に注目すべきことには、人間が存在しない社会は存在しないであろうことが挙げられます。

二番目に注目すべきことは、それにもかかわらず、人間を理解するだけでは社会を理解することができないということです（社会を人間に還元することはできません）。創発がある時には、何か新しい、そして存在論的に異なるものが起こるのです。つまり、社会を理解するためには、個々のエージェントについてと同様、社会の構造やメカニズムについても理解をしなければならないのです。このことは、学際的研究の必要性を示唆しています。というのも、社会の知を、人間エージェントに関する単一の学問分野の知へと還元することはできないためです。したがって、社会現象を理解するためには、少なくとも2つの学問分野、すなわちエージェントを考慮する分野と、社会の構造を考慮する分野が必要になってきます（存在論的創発の7層に関連して、少なくとも7つの専門分野がありうることを下記では示しています）。

三番目に注目すべきことは、これらの創発的な社会構造が構成的な個別エージェントに作用し返すということです。つまり、創発的な社会構造は、エージェントが自らを見出す境界条件を提供するのです*8。

このように、人は、自らを形作り、自らに機会と制約（境界条件）を与える社会に生まれますが、人は、また、社会を変革することもできるのです。バスターは、はじめ、構造とエージェンシーの関係を社会活動の転態モデル (Transformational Model of Social Activity; TMSA) を使って説明しました*9。バスターはその後、TMSAを拡大して環境の役割と私たちの自身との関わりを含め、それを四面的社会存在と呼びました*10。四面的社会存在を実践の概要に解釈し、彼は、転態する (Transformed) (自己に対する変化、例えばエージェント)、転態させる (Transformative) (周囲の状況や環境への変化)、信頼できる (Trustworthy) (他者との関係)、全体化する (Totalizing) (学際的な方法において何が起きているのか、そして起きていることに対していかに個人的に関与しているかを理解すること)、転態主義的な (Transformist) (エージェントは社会変革のために行動する)、過渡期の (Transitional) (政治構造がより抑圧的でないものへと移行する) 実践モデル (TTTTTT) へと行き着いたのです。以下に詳しく説明していきます。』(要旨集 p. 31)

(6) 創発的存在論のエージェントへの影響—TTTTTT

創発において表出されたあらゆる存在が、深いところで相互関連性をもつことの含意の一つは、世界のある部分における変化は必ずと他の部分の変化となるということです。つまり、エージェントは世界の一部であるため、世界（および社会）との関係においては双方向矢印があるのです。自身を変えようと努力しようと、社会を変えようと努力しようと、彼らはいつも自身と社会の両方を変えているのです。さらに言えば、社会や社会の他の人々にとって最善のものは、個人にとっても最善のものなのです。別の含意としては、行動を避けることは不可能であるということです。というのも、私たちがなすあらゆることが社会の構造とメカニズムを絶えず再生産しているためです。行動しないことを選択することはできません。つまり、私たちは、社会を再生産したり変革したりする方法で行動するかどうかしか選択できないのです。もしくは、有害な方法で、あるいは愛情のある方法で行動するかどうか。したがって、目標を達成するためには次のことが必要になります：

- ・主観的なニーズと客観的な可能性とのバランスをとること（私たちは目標について「現実的」でなければなりません）。
- ・私たちの実践を導く知／分析が、究極的には、あらゆる存在の繁栄をめざした道徳的な関与に基づいているのだと信じること。
- ・マルチメカニズム（学際的）全体性の観点から変化を考慮すること。
- ・変化は自己再帰的であることを覚えておくこと（再帰性とは全体性の内在化された形です）—それは私たち自身の変化を伴います。
- ・変化は新しい体制への政治的移行をも必然的に伴うことを認識すること。

これらすべてを考え合わせ、バスカー^{*11}は癒しの実践を次のように述べています：

「転態する（自己変容的で—自己への変化）；転態させ（環境変容的で—環境への変化）；信頼でき；全体化する（全包括的で自主反射的な）；転態主義的な（構造的変化を指向し、説明的批判や具体的ユートピア主義や参加型の活動促進的研究によって啓発された）；そして過渡期の[実践]、もしくはTTTTTT。」

我々のこれまでの知識の中では、「PDCAサイクル」の概念が近いかもしれない。これを様々な学問（知の体系）を動員してより良き方向へ変革していくことをTTTTTTという方法で提示している。筆者（正保）は、家政学に適用できるのではないか、という期待を込めて、今回のセミナーを企画したのであった。家政学が対象とする個

人・家族・コミュニティについて、虐待やDVなど命に係わるような課題は山積しているにもかかわらず、家政学としてどこから手を付けていいのか見えにくく、細分化された研究を統合していくことがうまくはできていない。他の学問体系にしても、それぞれに部分的には社会貢献ができているが、我々の生活をエウダイモニアなものに変えていくという力を持った学の体系があるわけではない。バスカーが示すのは、それぞれの細分化されてきた学問の体系を協働させて人々の幸福につなげていく筋道を可視化しているのではないか。全体像を理解しながら、自分たちにできる部分を明確にしていくことを、クリティカル・リアリズムは、（とくに人に関わる応用科学を標榜している分野に）提示していると思われる。

4. 家政学との関連において

(1) 社会科学（家政学など）は学際的でなければならない：7つのスケールの階層

実際のところ、リー先生は家政学を“Home Economics”と理解して原稿を書いてくださっているため、日本の家政学の体系というよりは実際を少し誤解しておられたかもしれず、社会科学の1つとして家政学をとらえた書きぶりとなっている。とくに日本の家政学が社会科学のみならず総合的な分野であることを理解すれば、より深い議論に発展する可能性が残っていると思われるが、現時点での書き方で紹介しておきたい。

「現実とは別の方法によっても階層化されています。スケールに応じて階層化されているのです。学問分野はそれぞれ、ある特定のスケールで問題に対処するようになっています。したがって、どの学問分野も重要であり、現実のある層を探求するというそれぞれが独自の役割を担っています。しかしながら、問題を完全に理解するためには、さまざまなスケールで問題を理解する必要があります。一つの方法論を現実のすべてのレベルに用いることはできません。以下のスケールのレベルの説明は規範的なものではありませんし、あなたが理解しようとしている問いによってもスケールは決定されるでしょう（例えば、特定の研究課題はグローバルなレベルで理解される必要はないかもしれません）。すなわち、私たちは主題に応じて研究方法論を選択する必要があります。以下のスケールの7つの層の説明はバスカーら^{*12}によるものです。虐待のあらゆるレベルを十分に理解するには、いくつかの学問分野と協力する必要があるかもしれません（つまり、学際的であることが必要でしょう）。

①スケールの第1レベルは、サブ・インディビジュアルのレベルで、特定の個人が無意識のようにもものごとを眺めること、前意識あるいは動機、衝動、欲望、切望、希望、夢、幻想。これはフロイト [1856-1939]、ユン

グ [1875-1961], そして心理学者が扱う世界です。

- ②スケールの第2レベルは、個人のレベルです。これは、ある個人の生涯を記録しておきたい〔伝記〕と思うレベルで、サルトル [1905-1980] を魅了したレベルです。彼の知的キャリアはスターリンの生涯を記すことに終わりましたが、彼は、個人の生涯を記録することこそが最終的に社会科学が成就すべきことだと考えたのです。クリティカル・リアリストは、社会科学における個々の伝記の理解に重要性を認めはしますが、ソビエト連邦共和国で起こったことをスケールの他の次元から考察することも重要だと考えます。
- ③スケールの第3レベルは、ミクロスケールのレベルで、これはアーヴィン・ゴフマン [1922-1982] とハロルド・ガーフィンケル [1917-2011] が対象としたレベルです。これは、電話の会話における発話交替や、舗道でぶつからない方法などを分析するレベルです。
- ④スケールの第4レベルは、古典的な社会学のレベルです。これは構造的なレベルで、このレベルでは、例えば、資本家と労働者の関係、自殺傾向のある人と仕事との関係などが考えられるでしょう（デュルケイム 2013/1897を参照）。
- ⑤スケールの第5のマクロレベルとは、社会全体の特性や特徴を調査したいと思うレベルです。例えば、フランスの教育システムがここでは関心のあるトピックになるかもしれません。もちろん、フランスそれ自体がより大きな文脈において位置づけられるため、これは次のレベルにつながっていきます。
- ⑥スケールの第6レベルは、植民地主義や資本主義のような地史的歷程を考慮に入れたいと思うレベルです。
- ⑦スケールの第7レベルは、ひとつの全体としての世界になるでしょう。このレベルで研究している学者の一人にウォラーステイン [1930-] がいます。彼は世界システム理論（世界システムアナリシスまたは世界システムパースペクティヴとしても知られています）を展開しました。」（要旨集 pp. 32-33）

これらのスケールは、それぞれの学問体系と関連付けられるものであるが、家政学も総合科学であるため、これらのいくつかの方法論を駆使して研究が重ねられてきたと言っているだろう。しかしながら、任意の方法を一つないしは複数組み合わせるにしても、スケールの全体像が7つのレベルととらえることができ、そのうちのどのレベルにおいて研究しているのか、ということを実感して研究するのとならないのでは、見通しは全く異なってくる。

(2) 具体的普遍 (concrete universal) と具体的単独 (concrete singular)

「クリティカル・リアリズムには、家政学に関連する別の重要な概念があります。それは、具体的普遍の概念です。どの普遍もひとつの具体的普遍です。例えば、どの人間も、人間であるという普遍的な側面と、普遍的ではないという側面の両方を備えています*13。虐待の一例を取りあげてみると、それには4つの側面があることがわかります：

①どの虐待事例もひとつの普遍的な事例です。

どの虐待事例も、他のあらゆる虐待事例と共通する特徴をもっているでしょう。

②どの虐待事例も媒介されます。

それにもかかわらず、どの虐待事例も、事例ごとの媒介または特異性をもつために、他のどのような事例とも異なるでしょう。

③どの虐待事例にも地史的歷程が存在します。

どの虐待の事例もそれぞれ異なる背景をもっているでしょう。つまり、異なる地史的歷程が存在するでしょう。虐待事例の場合は、歴史の現時点において、虐待がおそらくは部分的に社会の容認された構成要素となっているためだと考えられます。経済不況もおそらくは虐待の一因であり、それが経済的ストレスを生んでいるのです。南アフリカ [共和国] ではきわめて高いレベルの社会的攻撃性が存在していますが、それが部分的にはアパルトヘイトと植民地主義の結果としてもたらされたものであることが示唆されています。したがって、虐待の歷程には、地理的な要素だけでなく歴史的な要素も含まれるのです。

④どの虐待事例もそれぞれ特異です。

しかし、二つの虐待事例がまったく同じ場所からそして同時に発生した、つまり二つの事例がまったく同じ地史的歷程を経ていたと仮定してみたとして、それゆえ、その二つは同じであるといえるのでしょうか？いいえ。なぜなら、分析の第4レベル、すなわち単独性、もしくは還元不可能な唯一無二性（具体的単独性）をもつためです。」（要旨集 pp. 34-35）

(3) 7つのエニグマを用いてケーススタディを検討する

「治癒 (healing) の7つのエニグマは次のとおりです*14：

1. それは何ですか？（診断のエニグマ）
2. その徴候と症状は何ですか？（症候学のエニグマ）
3. それは何が原因ですか？（因果関係のエニグマ）
4. 何がそれを治す、もしくは緩和するのでしょうか／したのでしょうか？（治癒のエニグマ）
5. 何がそれを防いだのでしょうか？（予防のエニグマ）

6. それはどのように経験されますか？（解釈のエニグマ）

7. それを私たちはどのように癒し、そして緩和するのですか？（介入／治療／セラピー／リハビリテーション）

これら7つのエニグマのうち、最初の5つは具体的普遍に、最後の2つは具体的単独に関連しています。ウェルビーイングの実践家は、科学者と治癒者の両方であらねばなりません：科学者は、ある問題についての私たちの知識の欠如の不在化に関わり、私たちの理解をより完全なものへと押し進めます。そして治癒者は、健康やウェルビーイングの欠如の不在化に関わり、つまり原因や症状を取り除き（または少なくとも軽減し）、どの特定の個人に対してもその人が可能な最大限のウェルビーイングの表出につながります。」（要旨集 pp. 35-36）

エニグマとは、辞書を引けばそのままカタカナで表視されるか、謎と記されている。紙数の都合上、すべてを詳細に説明することができないのであるが、今まで説明してきたクリティカル・リアリズムのタームに照らして、簡単にエニグマの説明部分を引用する。今回のセミナーの後半部分では、以下の事例を引き、これらを上記の7つのエニグマのうちの3、4、5に当たるものをグループで話し合っていたことで、家政学の役割を具体的に考えるというワークショップを行った。

1. それは何ですか？（診断のエニグマ）

何が虐待を構成していますか？あなたの言葉づかいを考えてみましょう。つまり、あなたがどのように問題を説明しているかを考えてみましょう。

クリティカル・リアリストの概念：内省的批判、道徳的リアリズム、実在の意存的および自存的次元、DREI (C)、具体的普遍と単独

2. その徴候と症状は何ですか？（症候学のエニグマ）

「チェック欄 (tick-box)」アプローチを避けましょう。クリティカル・リアリストの概念：具体的普遍、具体的単独、不在、判断論的合理性、レトロダクティブな超事実的理論

3. それは何が原因ですか？（因果関係のエニグマ）

問題の根底にある学際的な理由は何ですか？クリティカル・リアリストの概念：説明的批判、スケールの7つの階層

4. 何がそれを治す、もしくは緩和するでしょうか／したでしょうか？（治癒のエニグマ）

これにはレトロディクティブなバック・キャストイングが必要です。つまり、その問題を治す、もしくは緩和するためには何が起こらなければならないのでしょうか？

クリティカル・リアリストの概念：レトロディクション

5. 何がそれを防いだのでしょうか？（予防のエニグマ） 実証主義的理論の因果関係（相関関係）に基づいた手

段的な介入を避けましょう。

クリティカル・リアリストの概念：超事実性、判断論的合理性

6. それはどのように経験されますか？（解釈のエニグマ）

7. それを私たちはどのように癒し、そして緩和するのですか？（介入／治療／セラピー／リハビリテーション）

私たちは世界の一部なのです。

クリティカル・リアリストの概念：構造／エージェンシー；反射性；転態する、転態させる、信頼できる、全体化する、転態主義的な、過渡期の (TTTTTT)」（要旨集 pp. 36-44を抜粋）

5. 7つのエニグマを使ったワークショップ

今回事例として使ったのは以下のケースである。

【資料：スキット】（2010年7月に実際に起きた事件について2010年7月31日の複数の新聞記事を参照）

とある市のマンションの一室で幼児2人の遺体が見つかった。警察は、死体遺棄の疑いで、この部屋に住む2人の母親で風俗店勤務、Xを逮捕した。「子育てに悩み、すべてから逃げたかった」、「風俗店の仕事がしんどくて、育児もいやになった」と供述していることが捜査関係者への取材で分かった。警察は、Xが、風俗店に勤め始めた〇年〇月から、育児放棄（ネグレクト）を激化させたとして調べている。

捜査関係者や元夫の両親によると、Xは、長女、Aちゃん（3）が生まれた当初は、真剣に子どもの面倒をみており、子どもとの充実した生活を自身のブログにもつぶっていた。その後、長男、Bちゃん（1）も生まれたか、〇年〇月に離婚。1人で2人の子供を育てながら、飲食店で勤務するようになった。

これまでの調べに、Xは「自分の時間がほしかった」とも供述。子育ての悩みを勤務先の風俗店の男性従業員に相談し「死にたい」と漏らすなど、育児ノイローゼ気味だったという。

この事例を先の1～7のエニグマに分けて検討をしていくと、まず、このXの事件に対してネグレクトという概念を当てはめるまでが1の「診断のエニグマ」となるであろう。さらに、ネグレクトという言葉も知らなかったであろうXを生んだ社会的背景を様々な面から「何が不在であったか」を探るのが2の「症候学のエニグマ」となる。ここから、エビデンスは無くともレトロダクティブな超事実的理論を検討することになる。例えば、「サポートする人物がいなかったのだろう。」「経済的に困窮していたのだろう。」など、不在のものを明らかにしていくこととなる。

先にも書いたように、以上の1、2のエニグマについてセミナーで共有しながら、実際には参加者にはその先

にある3, 4, 5のエニグマを書いてもらった。

例えば, 3「因果関係のエニグマ」においては, 「Xの親との関係もきっとXを救う状態には無かったのだろう。」「学校や地域社会からも孤立して大人になってしまったのだろう。」「日本の子育て支援やその他の福祉が行き届いてはいなかったのだろう。」「職場環境がひとり親での子育てには向いていなかった。」などの様々な要因が重なって, あるいは本人の自覚が足らずに, このような事件が起こった。

今回の事例の場合において, 4の「治療のエニグマ」においては, 家政学あるいは家庭科教育の分野からは, 別の視点から検討した。それは, この事例は日本で起こった実際の事件であるがXは現在も服役中であり, 家政学あるいは家庭科教育を専門とする我々が「治療・緩和」を行うことは不可能であるため, 「もしもXが10年前にバックキャストして教室に座っていたとしたら, 何を教えておくべきだったか。」という視点で考え, さらに5の「予防のエニグマ」である将来のXを生まないために, 何をすべきかと繋がることを理解していただいた。

6の「解釈のエニグマ」, 7の「介入/治療/セラピー/リハビリテーションのエニグマ」は, 今回の事例においては, 実際にXの近くで監督に当たっている専門家による仕事となるため, 我々の分野からは遠い話となるため, 当日の検討は割愛している。もちろん, テーマによってはこの部分を強調して検討していく必要があるであろうし, それを後方から支援する立場になる研究者も家政学研究者の中にはいることと思う。

参加者は, クリティカル・リアリズムという少々難解な理論に初めて触れた方が多く, 理論やテクニカル・タームの解説だけを聞いているときには, 「ピンとこない」という感想であったが, 家政学・家庭科教育に関連する事例のワークショップを行い, 討議・発表を終えた後は, とてもリラックスしてその言わんとするところを飲み込んでいただいた様子であった。

ただ, 参加者より「自分たちが行った部分が正解であったのかどうか気がなる。」という感想をいただいた。おそらく, 未来のXを出さないための教育を考えたとき, 先に挙げている具体的普遍 (concrete universal) と具体的単独 (concrete singular) の4つの側面のうち, 具体的普遍に近い①どの虐待事例もひとつの普遍的な事例, ②どの虐待事例も媒介される, ③どの虐待事例にも地史的歷程が存在する, という視点からの予防教育を行っていくしか方法はなく, まさしくこの方法で未来のXは生まれえない, と言い切ることは不可能なのだということも認識する必要がある。しかしながら, 逆に言えば, ①~③に当たる部分は防がねばならない, という自覚をもって予防教育としての家政教育を創っていくことが求

められると思われる。リー先生はクリティカル・リアリズムの世界的な権威といっても過言ではなく, 世界中で動いておられるが, この実践をみてとてもユニークで素晴らしいという評価をいただいたことは, とても心を強くし, また家政教育の役割が重要であることを再認識した次第である。

クリティカル・リアリズムの日本への紹介は始まったばかりで, とくに西日本を中心に研究グループがいくつか動いている。一つは立命館大学の佐藤春吉先生を中心とした「批判的实在論研究会」であり, 二つ目は鳴門教育大学の近森憲助先生を中心とする「鳴門CR研究会」である。そして三つ目として私が所属する家政学原論部会・生活経営部会中国四国地区会の傘下にあるDHEL研究会 (Deep Home Economics Learning Research Society) である。今回は, 家政教育部会の主催のセミナーであったが, リー先生はこの度これらの3つの研究会のために来日され, 京都・福山・鳴門にて講演されて, 日本でもCRの芽が伸びやがて開花していくことを期待して離日された。

脚注

- *1 Bhaskar, R. *Dialectic: The Pulse of Freedom*. London. Routledge, 2008 [1993], 式部信訳. 弁証法—自由の脈動. 東京. 作品社, 2015, 315
- *2 Bhaskar, R. *A Realist Theory of Science*. London. Routledge, 2013 [1975], 式部信訳. 科学と实在論—超越論的实在論と経験主義的批判. 東京. 法政大学出版局, 2009
- *3 前掲*2 *A Realist Theory of Science*, 50-51を参照
- *4 Bhaskar, R. *Scientific Realism and Human Emancipation*. London. Routledge, 2009 [1987], 232-234
- *5 前掲*2 科学と实在論, 16
- *6 前掲*1 弁証法, 183
- *7 たとえば, 引用文献の2) 45
- *8 前掲*2 *A Realist Theory of Science*, 113 および引用文献の2) 30を参照
- *9 前掲*4
- *10 前掲*1
- *11 前掲*1 弁証法, 198, 412
- *12 引用文献の2) 35
- *13 引用文献の2) 67-68
- *14 引用文献の2) 89

引用・参考文献

- 1) (一社) 日本家政学会家政教育部会. 「クリティカル・リアリズムの方法と家政教育の新たな展開」要旨集. 家政教育部会, 2017, 25-50
- 2) Bhaskar, R.; Danermark, B.; Price L. *Interdisciplinarity and Wellbeing: A Critical Realist General Theory of Interdisciplinarity*. London. Routledge, 2017